

# 会員のば

## 医学部を訪問する中高生への 対応について考えること

札幌医科大学医師会  
札幌医科大学附属病院 循環器・腎臓・代謝内分泌内科

三浦 哲嗣

大学の広報活動のひとつとして「オープンキャンパス」が近年一般的になっている。高校生を対象に、大学施設を公開し、入学後の学修内容、卒業後の進路についての情報を提供する催しである。札幌医科大学でも「オープンキャンパス」を開催しているが、そのほかにも医学部進学を希望する高校生を対象とした「メディカル・キャンプ・セミナー」といった研修会への協力や、中学生を対象とした企画など、中学生や高校生に医学部の情報を提供する機会は増えている。彼らに最も伝える必要のあることは何であろうか？ 一部の施設で行われているような、ファントムを使って聴診や初歩的な外科手技の実技をさせることが重要ではないことは明らかであろう。

医学部の見学に来る生徒たちに、最も知ってほしいと思うことは、想像力を高めることの重要性である。日本を含めた先進国で社会格差が拡大していることは、最近多く報道され、北海道でも生活の豊かさだけでなく、教育や医療体制について地域格差は存在する。地域による違いの全てを単純に格差として不利益と結びつけることはできない。しかし、生育や生活の環境の違いが拡大しているとすれば、環境が異なる者どうしの理解や意思疎通の障害も大きくなっていることになる。疾患の発症率は社会経済的な階層が低いほど高く、一方、医学部入学者の多くは経済的に恵まれた都市部の家庭の出身という現状がある。残念ながら、最近の医学部学生の中で、患者を取り巻く社会問題への関心を持つ者が増えているには見えない。こうした状況の中で、想像力の育成が不十分であれば、将来の医師患者関係や多職種連携に、さらに多くの問題を生じることは明白である。また、医学研究に想像力が重要であることは言うまでもない。

想像力についてJ. K. Rowlingの言葉が印象深い。ハリーマンシリーズの著者として有名なこの作家は、2008年ハーバード大学卒業式での講演の中で「私たちが世界を変えるために魔法は必要ではない。

私たちは、良い世界を想像する力を既に自分の内に持っているのだ」「他者には共感しないということを選択すれば、怪物を育成することになる。それは、私たち自身があからさまな悪を行わないとしても、無関心を通して悪と結託することになるのだ」と述べ、アメリカや国際社会のリーダーとなるであろう若者たちに、想像力と他者への共感を通して、より良い世界の構築を訴えていたように記憶している。

医師にとって、成育環境や生活環境が自分とは大きく異なる患者やその家族の発言の背景を理解するためには、十分な想像力と共感する力が不可欠であり、医学部の見学に訪れる中学生と高校生にも、そうしたことに気づいてもらいたいと考えている。そのための仕掛けとして、これまでにいくつか課題図書を設定してきた。中学生には「怪物はささやく（パトリック・ネス著）」「ぼくたちの骨（檜崎 茜著）」など、高校生には「赤ちゃんの科学-ヒトはどのように生まれてくるか（マーク・スローン著）」「村で病気とたたかう（若月俊一著）」などである。「怪物はささやく」は、闘病中の母を持つ少年に墓地の真ん中に立つイチイの樹の怪物が真夜中に訪れる物語で、多くの文学賞を受けた作品である。また、今年8月の「メディカル・キャンプ・セミナー」で本学のアドミッション・センターが企画したプログラムでは、参加する高校生が「生老病死を支える：地域ケアの新しい試み（方波見康雄 著）」を読書したのちに、グループ討論を行うことにしている。医学部入学後の学生についても、想像力と共感する力の向上は重要な課題であるが、その教育方策と評価は、ある意味で医師国家試験の対策よりも難しい。しかし、教育課題の内容、演習・実習の形式、評価方法など多くの点の見直しを通して達成したい目標と考えている。